

**[調査・研究報告] 道頓堀の景観変遷 : 芝居町から
「食い倒れの街」へ**

著者	長谷 洋一, 林 武文, 橋寺 知子, 森本 幾子
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	22
ページ	1-10
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9963

【調査・研究報告】

道頓堀の景観変遷——芝居町から「食い倒れの街」へ——

長谷洋一
林 武文
橋 寺 知子
森 本 幾子

はじめに

本稿は、平成二六年度関西大学創立一三〇周年記念特別研究費（なわ・大阪研究）、研究課題「道頓堀の景観変遷——芝居町から「食い倒れの街」へ——」の報告である。

本研究は大阪都市遺産研究センターが行った道頓堀芝居町研究の成果を受けて松竹座が開場した大正一二年（一九二三）以降の道頓堀の「都市文化と景観の変遷」を跡付けることを課題にした。

① ランドマークとなる松竹座に関わる道頓堀の舞台美術に関する研究。二〇一四年に遺族から寄贈された山田伸吉資料の調査研究。

② 道頓堀を構成する茶屋・料理店・土産物屋・料亭・旅館などの飲食店に関する調査研究。具体的には収集した明治・昭和初期の商標ラベル・チラシなどをデジタル化し、さらに地図上に落とし込んだマップ

の作成。

③ 伝統的な和風空間としての道頓堀に、洋館の松竹座が建つことで、街全体に洋風化がすすんだ過程を建築景観変遷としての究明。なかでも中村儀右衛門資料の中で建築的資料がもつとも充実しており道頓堀の洋館の先駆けとなるものであったが、実際には建てられず幻の洋館となった洋風浪花座のCGによる復元。

以上の三点を具体的な研究課題とし、研究分担として①を長谷、②を森本、③を林・橋寺がそれぞれ調査研究を行った。

調査研究報告を行う前に調査研究の核となる山田伸吉・中村儀右衛門の経歴について簡略ながらみてみたい。

一、山田伸吉資料と中村儀右衛門資料

山田伸吉(本名・真吉)は、明治三四年(一九〇二)に大阪府西成郡稗島(現・大阪市西淀川区上姫島)に生まれた。大正一二年(一九二二)に松竹合名会社に入社し、最初の仕事は、小山内薫演出、市川左団次主演で京都・知恵院山門を背景に演じられたページェント『織田信長』及び映画『底なし湖』のポスター制作であった。

松竹は、同年四月に楽劇部を創設し、翌年五月に大阪松竹座を道頓堀に開場する。楽劇部は大阪松竹座専属となり、柿落とし公演は「アルルの女」であった。また大正一三年には焼失した明治座を京都松竹座と改称、同七月には松竹キネマの下加茂撮影所が誕生する。

山田は、松竹座ポスターのデザインのほか、舞台背景デザインや興行館のプログラムである『SHOCHIKUZA NEWS』の表紙など、上演前の舞台に関する様々な美術デザインを手がけた。

その後、書籍の装丁や挿絵も手がけるようになり、昭和一二年(一九三七)に京都松竹座や大阪劇場が火災に遭い、その頃からは洋画家を指して春陽会や新文展、独立美術協会展、二科会などに作品を出品している。戦後はフリーの舞台美術家として各劇場の舞台装置を手掛けている。一方、洋画家として活躍も二科会を中心に出品するようになる。昭和三八年(一九六三)頃からは三対一の横長のキャンバス(ベニア板地)に芝居の名場面を組み合わせた「油彩芝居画」を考案し、昭和三八年(一九六三)に京都・土橋画廊で初の個展「名舞台油彩絵」展を開催、以降もほぼ毎年、名古屋御園座や大阪、東京の大丸、大阪・ギャラリー日本

一、岐阜・ヒガシ画廊など各地で「油彩芝居画」展が開催された。昭和五六年(一九八一)三月九日に逝去する。

中村儀右衛門は、嘉永五年(一八五二)二月八日、大阪市西区北堀江上通二丁目(現大阪市西区北堀江)に生まれた。一二歳から父のもとで大工の修業を始めるとともに、製図法などを学び、明治五年(一八七二)に父の死去とともに跡目を相続し、五代目中村儀右衛門を名乗る。二〇代のころには、京都や大阪の小学校のほか、九州の病院や個人の邸宅などの建築を手がけ、明治一八年には、東京の明治宮殿(皇居内)の造営にも携わっている。この間、明治一六年(一八八三)には、木造建築の加工技術である「規矩術」のテキストとして『明治中学規矩要訣』を執筆している。

明治二三年(一八九〇)の東京・柳盛座に続き、明治二六年(一八九三)に横井勘一の委嘱による千日前・横井座の設計・建築をおこなって以降、劇場建築を手がけるようになり、弁天座・浪花座・角座など、道頓堀の劇場のほかにも、大阪市内の劇場の新築や修築を請け負うなど、大阪を拠点に活躍した。大正一〇年(一九二二)一月二日に死去し、下寺町に埋葬された。

大阪市遺産研究センター所蔵の「中村儀右衛門資料」は、彼が大工棟梁として携わった道頓堀ほか大阪の劇場の建築設計図面や仕様書などの書類、舞台の背景画の下絵をまとめた大道具帳のほか、日記・覚書などを含んだ総数四五五点に及ぶものである。

そのうち、建築関係資料は二九三点を数え、関西、とくに大阪の劇場や観物場、寄席、映画館が多くを占めている。中村儀右衛門資料は、設

計と施工をおこなった大工が保管していた資料であり、実際に建てられて完成した建物の図面だけではなく、最初の段階のプランのようなスケッチや計画途中の検討段階の図面などが多く、その中には候補段階で取り下げられた設計案の図面なども含まれている。さらにこれらの図面だけでなく、工事の細かな仕様を文書で記述した仕様書や摘要書、役所への届出書類の写し、見積書、材木の一覧表、契約書など、様々なものが含まれている。劇場の建築図面や仕様書は、劇場の正面や側面などの外観、内部・外部の構造、工事に必要な材料や工事方法などが記されている。資料に残っている劇場は、「道頓堀五座」のうち浪花座・角座・中座・弁天座があり、ほかにも千日前、梅田、天満などの劇場も含まれ、彼が「劇場大工」として大阪の数多くの劇場建築を手がけていたことがわかる。

また、明治三〇〜四〇年代の大道具帳は、芝居の舞台の背景画や大道具を、演目や場面ごとに描いた帳面で、表紙には興行した年月、上演演目が記されている。これらの資料からは明治・大正の大阪における劇場建設の様子とともに、当時の芝居小屋の息づかいが伝わる貴重な資料である。

二、松竹座に関わる道頓堀の舞台美術に関する研究

山田伸吉資料に関して、遺族から新たに寄贈された約一六五点について整理・調査を行った。内訳は油彩画・デッサン・下絵・版木・図書等である。

山田の遺品関係としては、戸籍抄本や大阪府立八尾中学校在籍時の学籍手帳、裏面に「松竹歌劇団」と押印された千日土地建物株式会社従業員証、松竹の徽章などがあるが、山田の画業関係では、版画芝居画用版木の寄贈が目を引く。

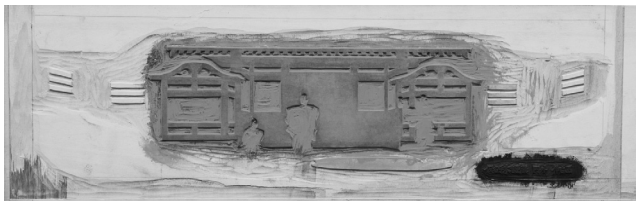
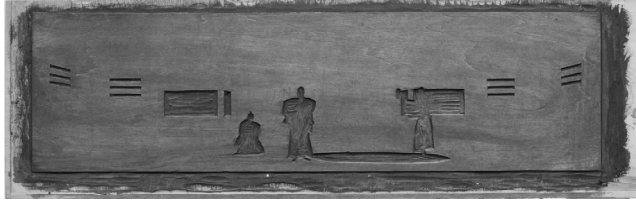
特に版画による芝居画は、作品としてはその存在が知られていた(図1)《仮名手本忠臣蔵 門外》が版木の存在まではわからず、今回、寄贈された版木は製作プロセスがわかる貴重な作品である。

版木は全部で一六枚あり、またマスキング用の原紙一枚を伴っている。題材としては「仮名手本忠臣蔵 門外」版木のほか、「助六由縁江戸桜」があり、それぞれの版木には見当が付けられている。一枚の版木を単色の色版として使用する場合もあるが、なかには複数の色版として使用した版木も見られる。版木を重ね摺りした後、細部を手彩色している。

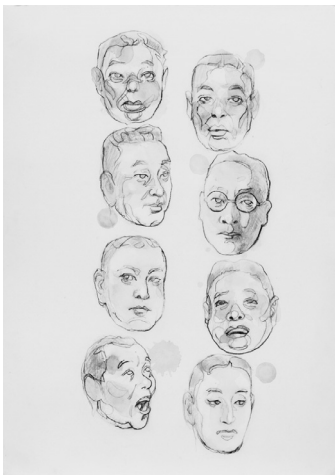
このほか、多数の挿絵原画は広汎な山田の活躍を知る上で欠かせない資料であり、長谷川幸延『大阪芸人かたぎ』(昭和五二年刊)のカバー原画や雑誌『演劇界』に昭和五三年に連載された「劇場スケッチ」などが含まれていた。

松竹座に関わる資料としては松竹座の舞台写真が掲げられる。いずれも舞台真正面から撮影されている。

通常、上演中の写真撮影が禁じられるが、劇場側が参考資料として撮影されたものである。撮影時期や上演の演目、撮影場所等は今後の研究課題であるが、当時の舞台装置がどのようなものであったのかを知る上で大変興味深い。なかにはセンター所蔵の舞台背景画デッサンと類似する舞台もみられる。



版画芝居画《仮名手本忠臣蔵 門外》と版木（便宜上左右反転）





寄贈を受けた山田の油彩画一三点は主に一九七九年から一九八〇年にかけての作品であるが、モチーフの輪郭を粗い麻紐で形どり、そこに絵具を厚塗りにしていく作品である。時には画面にも麻布を貼るなど、晩年になっても油彩画に関しては新境地を開こうとする意志が読み取れる。しかしながら昭和五六年（一九八一）三月九日にガンのため逝去してしまう。

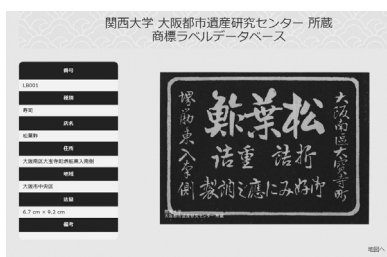
三、茶屋・料理屋・土産物屋・料亭・旅館などに関する調査研究

ラベルの詳細については後述の森本幾子「浪花贅六庵（なにわぜいろ

くあん）蒐集ラベルコレクション」によられたいが、明治期から昭和初期にかけて大阪を中心とする店舗の商標ラベル三〇三点のコレクションである「浪花贅六庵蒐集ラベルコレクション」のデータベースの開発を林武文が林みゆき氏（当時関西大学総合情報学部四年、林武文研究室）の協力を仰ぎながら行った。近代から現代に至る都市大阪の商業文化を知るうえで貴重な資料であるコレクションの大半は菓子店や寿司店が大半を占めるが、一部料理店や食料品店などもあり、コレクションのほとんどの店舗が、道頓堀を中心に大阪市内の川沿いに分布していることがわかった。

四、CGによる洋風浪花座の復元

「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」にもとづき製作された「洋風浪



「花座復元模型」をもとにCGを制作し、CG「幻の洋風浪花座編」として、大阪都市遺産研究センターホームページで公開している。CGの制作に際しては、秋田県小坂町・康楽館に内部映像の撮影で協力を得るとともに、道頓堀商店会の斡旋で、かつての店舗の面影を残している店舗の実測調査を行い、それらをもとにCGでは道頓堀の通りから浪花座内部までを復元している。



五、成果の公表

整理・調査研究が終わった資料は平成二六年（二〇一四）一月一日から平成二七年（二〇一五）一月一七日まで、関西大学博物館の冬季企画展「新収蔵資料展」として一般公開した。展示資料は、大阪都市遺産研究センター所蔵資料に加え、寄贈を受けた資料から松竹の徽章やパンフレット、版木、油彩画、写真など山田伸吉遺愛の資料が展示された。なお一二月六日には山田伸吉関係資料の列品解説を行っている。

また平成二〇年（二〇〇八）五月に関西大学と早稲田大学とで締結された連携協力協定の一環として、平成二六年（二〇一四）一月一八日

（平成二七年（二〇一五）二月四日まで早稲田大学坪内博士記念演劇博物館との共同主催で同館常設展示三階近世コーナーにおいてコラボ展「芝居町道頓堀の風景——大道具師中村儀右衛門と芝居画家山田伸吉——」展を実施し、油彩芝居画や洋風浪花座模型、大道具帳等を展示した。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館でも平成二七年（二〇一五）一月二三日にギャラリートークを実施した。

六、フォーラムの実施

平成二七年（二〇一五）一月二四日には、道頓堀商店会・関西大学東京センターの協力を得て、早稲田大学演劇博物館との共同主催で「道頓堀フォーラムin東京 芝居町道頓堀の風景——大道具師 中村儀右衛門と芝居画家 山田伸吉——」を関西大学東京センターで開催した。

講演は、児玉竜一氏（早稲田大学文学部教授・演劇博物館副館長）による「歌舞伎の演出と大阪の舞台美術」と題したご講演をいただいたほか、長谷が「山田伸吉の生涯と画業」、高橋隆博関西大学名誉教授（当時



関西大学文学部教授)が「道頓堀 いま・むかし」と題した講演を行い、林が「大正期道頓堀のCG復元」、橋寺が「中村儀右衛門資料の劇場図面」と題した報告を行った。これにあわせて当日、関西大学東京センターの別室にて山田伸吉舞台背景デザイン画及び中村儀右衛門のよる角座・浪花座関係の設計図面、今回新たに製作した六〇分の一洋風浪花座模型を展示した。なおフォーラムに先立つ平成二五年一月一九日にも同様の展示を行った。

研究者

長谷 洋一 (関西大学文学部教授)

林 武文 (関西大学総合情報学部教授)

橋寺 知子 (関西大学環境都市工学部建築学科 准教授)

森本 幾子 (尾道市立大学経済情報学部 講師)

商標ラベルデータベースの開発

林 武 文

を掲載した。

一、概要

本データベースは、大阪都市遺産研究センター所蔵の『浪花贅六庵蒐集ラベルコレクション』より、明治から昭和初期にかけての商標ラベル三〇三点の画像を掲載し、それぞれの書誌データなどの項目と店舗の位置情報を付してWeb上に公開するものである。

二、開発環境

データベース・プラットフォームとしてMySQL5.6を、また開発言語としてPHP5.4をJavaScriptを用いてWebサイトを構築した。運用サーバはRed Hat Linux (<https://lolipop.jp/>)である。文字コードはHTML5で推奨されるUTF-8を用いた。

三、システムの機能

キーワードやカテゴリから商標ラベルの検索を行う「テキスト検索ページ」と商標ラベルの店舗の位置を地図上に表示して検索を行う「マップ検索ページ」を作成し、トップページからリンクを張った。検索操作中には両者を切り替えて表示することも可能である。両ページにおける検索結果として表示される個別のデータページには、ラベルの拡大画像と付随する情報として、ラベルの種別、店名、住所、地域、寸法、備考

三ー一 テキスト検索ページ

初期設定として、掲載されている商標ラベルデータ全件一覧のサムネイルが表示される。それぞれのデータをクリックすると、個別のデータページが表示される。データベースの検索機能は以下の通りである。

- ・簡易検索・キーワード欄に語句を入力し、テキスト情報全てに対して部分一致検索を行う。
- ・カテゴリ検索・ラベルの種別からデータを検索する。全ラベルを「寿司」・「味噌」・「菓子」・「その他」の四種別のカテゴリに分類した。
- ・詳細検索・【種別】・【店名】・【住所】・【地域】・【備考】の各項目をOR結合もしくはAND結合で結んで検索を行えるようにした。

三ー二 マップ検索ページ

大正～昭和初期の大阪市南区（現在の中央区）付近の地図画像を用い、その上に店舗の位置を赤色のポイントで表示した。ポイントの上にマウスポイントを重ねるとラベルのサムネイルがオーバーラップして表示され、それをクリックすると、個別のデータページに移行するようにした。

四、公開

二〇一五年三月三十一日より、関西大学大阪都市遺産研究センターのホームページよりリンクを張って公開している。（設置URL：<http://haya.bitter.jp/label/>）

道頓堀町屋（旧赤鬼）の実測調査

橋 寺 知 子

戦前期の道頓堀の景観は、芝居町として賑わう様子が絵葉書等で知れるものの、建築資料が残されておらず、建物の詳細は明らかでない。第二次世界大戦末期の空襲で壊滅的な被害を受け、木造建築の街並みは消滅した。だが戦後の復興は意外と早く、劇場や飲食店が数年で建ち並んだことが写真資料でわかる。建物は新しくなっても土地の区画は元のままであることが多く、現在でも道頓堀北側には間口が狭いが道頓堀川まで達する建物が多く、戦前の建ち並びの様子と一致する所もある。二〇一四年一二月に道頓堀一丁目、中座跡地北側にある町屋の正面立面を実測する機会を得た。戦前期には、この辺りには芝居茶

屋が建ち並び、当該敷地には「三亀」か「松川」があったと推定される。建物は当時のものではないが、復興期



写真1 赤鬼営業中



写真2 赤鬼閉店後



写真3 現況



写真4 屋上(現況)

に建てられた建物はある程度、旧建物の特徴を引き継いでいると推定され、芝居茶屋の建築の大きさやプロポーション等を知る参考になると考えられる。ここにその実測調査結果を示す。
当該建物は改修され、現在はビルのように見える（写真3）が、数年前まで店舗として利用され、閉店後に看板が外されると、市街地に建つ三階建町屋の立面を表していた（写真2）。写真を比較することで、開口部や壁面の痕跡から旧建物の立面を推定することができる（図2）。開口部の意匠や軒の構え、壁面の素材など、残された写真資料から引き続き検討が必要である。高い位置から撮影した写真4を見ると、当該建物は道頓堀川まで達しておらず、西隣の比較的新しいビルとの関係は不明である。戦前期は川まで達していたと推定され、東隣のビルのような敷地で、現在は道路側約半分が残ったと考えられる。

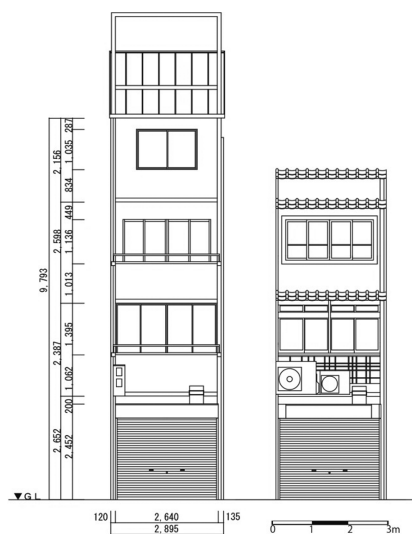


図1 正面立面図(現況) 図2 復元推定図

「浪花贅六庵蒐集ラベルコレクション」

尾道市立大学 森 本 幾 子

浪花贅六庵は、本名を浪花善三と言ひ、昭和初期に活躍した大阪の趣味人グループの世話役的存在であった。生歿年は不詳とされている。道頓堀・戎橋東で「ナニワ子供用品店」を営むほか、道頓堀に営業所や趣味の店を何軒が開き、活動の拠点としていた。住所は、転々としていたようで、分かっている住所だけでも「大阪市南区西櫓町十番地」「大阪市住吉区住之江公園池畔」がある。

浪花贅六庵の主な活動は、木版絵葉書で、大阪・ミナミで開催された宝船絵葉書交換会の「宝葉会」の幹事や「美葉会」の同人となるなど、当時の絵葉書創作に影響を与えた人物として知られている。

さて、浪花贅六庵蒐集ラベルは、形、絵、彩色ともにデザイン性の高いものばかりで、昭和初期の大阪美術界の発展をよく物語っている。蒐集ラベルNo.「LB077」には、宮島しゃもじを模したもの（一・一・四×三・八cm）のなかに「蒐集品 桃太郎を因むもの一切 各地の杓子、土俗玩具 名物レッテル、驛辨票 乗車券、小繪馬、寶船 大阪市南区西櫓町十 浪花贅六庵」と印刷されており、贅六庵が、これらを精力的に集めていたことがうかがえる。

現在残されている贅六庵作の木版絵葉書には、「名物レッテル」「驛辨票」「乗車券」などがそのまま貼り付けられ、背景の絵とともに、何とも趣ある作品となっている。蒐集ラベルの中には、ちょうど葉書に貼り付

けることのできる寸法のものも多く、ラベルを貼り付けた葉書の余白部分に、作家の意匠をこらして一枚の絵葉書が完成するようになっていたことから、ラベルを蒐集した主な目的の一つは、木版画絵葉書のデザインのためであると考えられることができる。

蒐集ラベルからは、現在も営業を続けている店をいくつか発見することができ、戦中戦後の苦難を乗り越え、変わらず店を存続させてきた大阪商人の底力を感じさせる。また、今はそのほとんどが姿を消してしまつた寿司店・菓子店など、多くの飲食店の存在を、われわれの内に蘇らせてくれる。中座や浪花座の道頓堀芝居興行の行き帰りや合間に、人々が入店し、雑踏のなか、大阪名物を賞味していた様子が目に浮かんでくるようである。

大正から昭和初期へとつづく時期、とくに芝居で発展した道頓堀界隈は、浪花贅六庵のような大阪の趣味人たちの感性を刺激し、当時流行した絵葉書創作などを介して、同地域の芝居および飲食文化を発信していたのではないだろうか。

浪花贅六庵蒐集ラベルコレクションは、昭和初期の都市大阪の隆盛と、大阪を象徴する街・ミナミで活動することを誇りとする文化人の自尊心を感じる好資料である。

*参考文献

『衍書月刊 絵葉書国人物誌（大正・昭和初期編）』衍復舎、二〇〇七年五月